

キーワード：国際結婚 主体性 生活戦略 トランスナショナリズム ライフコース

1. 研究背景

近年、アジア諸国における国際結婚が広がりつつあり、社会的な注目を集めている。国際結婚研究はカップル内の異文化の葛藤やその交渉等の私的な問題にとどまらず、グローバルな経済構造の格差がもたらす国際移動の結果として分析されていることも多い(伊藤・足立 2008)。出身地域の違いや育てられた家庭環境等の状況の違いにより、国際結婚という行為に対する決定や結婚移住の行為は異なることが予想され、国際結婚の多様性を考慮した分析が不可欠である。

一方、国際結婚者は、海外に住む親族や友人とのつながりを維持し、出身国や海外で暮らしている地域に、定期的に行き来しているという、海外の人々とのつながりは、彼/彼女らの国際移動をめぐるライフコースの形成と発展に大きな影響を及ぼすと考えられる。近年の移民研究の潮流であるトランスナショナリズム論は、そのような移民が創出する国境を越えたつながりや実践の理論化を試みてきた。

2. 先行研究

国際結婚者のライフコースの一つの影響要因として、個人の「主体性」(agency)に着目する必要がある。本研究で、ギデンス(1976)による主体性の定義を採用し、国際結婚女性が結婚移住の生活の中で、積極的に自分の能動性を発揮し、周囲の資源を積極的に利用し、物事を自分の望ましい方向に進ませることを考察する。

近年、国際結婚した当事者の主体性に着目した研究が増えてきた。例えば、「嫁」を振る舞うことで地域にうまく溶け込む国際結婚女性の事例(藤田 2005)；ジェンダー秩序に厳しい夫の家族の中で主導権を獲得する国際結婚女性の世帯内交渉の事例(柳 2006)；生存戦略として国際結婚を選択したインドネシア女性のあり様を分析する研究(小池・徐 2018)などがある。

先行研究には、農村部の国際結婚に注目する研究が多く(賽漢 2011；郝 2014)、都市部で、高学歴・中産階級の国際結婚者に関する研究が少ない。Levitt and Schiller (2004)とTsuda (2012)が述べるように、国際移住は単にA地点からB地点への移動ではなく、むしろ、これは移民が母国と受入国の両方と同時に取り組みを伴う生涯にわたるプロセスである。そのため、国際結婚者の主体性にもトランスナショナルな視点を加える必要があると考えられる。

3. 研究目的

本研究は、トランスナショナリズムの視点から、ライフコースの経過と共に、国際結婚女性の主体性の構築・維持がどのような要因に規制され、どのような効果を果たしているのかを考察することを目的とする。まずは、国際結婚女性が異なるライフステージにおいて展開する主体性の構築・維持戦略を究明し、ライフコースとどのような関係があるかを明らかにする。また、トランスナショナルな社会関係資本(親子関係、ネットワーク)は、どのように主体性の構築に影響を及ぼすのかについて分析していく。

4. 研究方法

日本人男性と結婚した中国出身の高学歴女性9名に対し国際結婚移住の経験と意識について半構造化インタビューを行い、国際結婚移住の動機とプロセスを調査した。調査協力者は、スノーボール・サンプリングによって募った。

5. 考察

- 5.1 多くの調査対象者は、「伝統的な日本人」について「女性の地位が低い」といったステレオタイプを持っていることがわかった。結婚相手に出会ってから、相手がそのような「伝統的な日本人」あるいは「普通の日本人とは異なる」のが前提とされ、「平等性のある」結婚相手を選んだのである。
- 5.2 親からの経済的・情緒的なサポートをもらい、留学、就職、結婚という道に歩み、婚姻における主体性を得られるケースが多くあった。その一方、同じく中間層出身の女性ではあるが、親からのサポートを得られず、日本での生活や仕事、結婚自体は順調にゆかず、主体性を失ってしまったケースもあった。
- 5.3 仕事や居住地について、十分な発言権を持っている国際結婚女性の姿が窺われる。彼女達は、自分の仕事だけではなく、トランスナショナルな資源やネットワーク等を積極的に利用し、夫の仕事についてアドバイスをしたり、助けてあげたりすることができる。

- 5.4 これらの国際結婚女性は、一方的に日本で居住し、日本社会に適応するのではなく、トランスナショナルなライフコースを歩み、将来的には、自分の好きなライフスタイルによって居住地を選択することがわかる。
- 5.5 中国語や中国文化を資源として夫や子供に勉強させることがわかった。近年、中国の経済状況が良くなるにつれ、女性達が「中国人」としての自己アイデンティティを強く持つようになった。夫側も、妻のトランスナショナルなネットワークや言語資源を利用し、自分の仕事の助けにしている。そこから、中国人妻の家庭内の主導的な地位が見える。

6. 政策的インプリケーションと本研究の限界

本研究の対象者のような外国人高学歴人材を生かすための対応策として、会社の制度や構造も変化を受け入れざるを得ないだろう。それらの人材を生かし社会に貢献させるために、結婚・出産しても、就業し続けやすい職場制度や環境の整備や、結婚・出産のため一旦仕事を辞めても、彼女らの復職や再就業を手助けするファミリーフレンドリーな制度や環境の整備が必要ではなからうか。今後は、年齢層・社会階層等、より幅広く、多様な事例の収集と分析が課題である。

参考文献

- 藤田美佳 2005「農村に投げかけた『外国人花嫁』の波紋—生活者としての再発見」佐藤郡衛、吉谷武志編『ひとを分けるもの、つなぐもの—異文化間教育からの挑戦』ナカニシヤ出版
- Giddens, A. 1976. *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson and Co., 松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳 『社会学の新しい方法基準: 理解社会学の共感的批判』而立書房 1987年.
- 郝洪芳 2014「東アジアにおける越境結婚の連鎖——送り出し国から受け入れ国に転換しつつある中国の事例を中心に——」, 日中社会学会『21世紀東アジア社会学』第6号, 172-87.
- 伊藤るり, 足立真理子 2008『国際移動と＜連鎖するジェンダー＞—再生産領域のグローバル化』作品社.
- 小池誠, 徐幼恩 2018「台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性: 結婚と行為主体性に関する人類学的試論」『人間文化研究』8, 187-216.
- Levitt, P., & Schiller, N.G. 2004. Conceptualizing simultaneity: A transnational social field perspective on society. *International Migration Review*, 38(3), 1002-39.
- 賽漢卓娜 2011「国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性—」勁草書房.
- Tsuda, T. 2012. Whatever happened to simultaneity? Transnational migration theory and dual engagement in sending and receiving countries. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 38(4), 631-49.
- 柳蓮淑 2005「外国人妻の世帯内ジェンダー関係の再編と交渉—農村部在住韓国人妻の事例を中心に」『お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢』8, 231-40.